

ならの木便り

子ども達の成長を楽しみながら



コロナウイルスの流行に一喜一憂の日々が続いている大人社会、ご家族の方とずっと楽しみにしていたであろう入園式も、当初予定していた4月には行うことができませんでした。でも、子ども達はそんなことなど全く気にする様子も無く、元気一杯に園での生活を楽しんでおります。

年少組の子ども達は、ずっと前から幼稚園に通ってきているみたいに、ごく自然に楽しそうに過ごしている様子が頼もしく感じられます。本当に何にでも興味を持って、また、いろいろ工夫をして遊びをつくりだしているように見えます。そして自ら成長しようとしている力に溢れているようです。

年少児に限らず、そんな子ども達の様子を見ると、「子どもは五歳までにその一生涯に学ぶ全てを学び終えるものである」といった言葉が浮かびます。それは、今から200年くらい前に世界で初めて幼稚園を創設した、フレーベルというドイツの有名な教育家の言葉です。この言葉は、現在の幼児教育にとっても至言とされています。

今日、6月24日の一時帰りの日です。降園時間も過ぎたころ、体操を指導している斉藤先生の元気な若々しい声の傍らで、鹿住先生が夢中で長縄飛びで子ども達を遊ばしていました。年中児のなかに年少児が混じり、5～6人で楽しそうに行っていました。年少児が上手に飛んだあと、年中児のA子ちゃんが挑戦しました。跳べません。又挑戦しますが跳べません。リズムが掴めないのです。そこで、一時、傍らで次の年中児のお友達が跳ぶ様子をよく見させて身体でリズムをとらせてみてから再度挑戦させました。すると、すぐに跳べるではありませんか、1～2回は縄に足を取られましたけれども。跳べたときのA子ちゃんの嬉しそうなお顔、「できた！すごい」と鹿住先生に声をかけられると、その顔はもっと嬉しそうになりました。そんな風と一緒に喜びあうことで、子ども同士でも、もっとやる気が起こるようです。順番を待っては皆で熱心に跳べる数を数えておりました。その中には年中児で200回も跳ぶ子も現れたそうです。

その日の午前中には年少児の教室を見に行ったのですが、子ども達は画用紙にペロペロキャンディーと表して、渦巻きを上手に描いておりました。

お父さんやお母さんから離れ、幼稚園に通い始めて一週間余りで成長の様子を見せてくれる子ども達です。よく食べよく眠り、そしてよく遊ぶ傍らで見守ってくれる人がいる、愛され大切にされているのを無意識に感じられる、そんな環境が子ども達の心に、何にでも好奇心を持ち挑戦しようとする力、いわゆる非認知能力をより強く育てていきます。

『世界の名言・名句集』のなかに、『愛されることは幸福ではなく、愛することこそ幸福だ』という、ドイツの小説家であり詩人であるヘルマン・ヘッセの言葉が載っておりました。本当に素敵な言葉だと思います。ただしこれは一人前の大人になってからのことであり、乳児の時代・幼児の時代などは愛されることが幸福であり、将来人を愛することが出来るようになるためには、この愛された記憶が大事な役目を果たします。

ほとんどの親は子どもの幸せを願っているのに、年を取っていてもそれをつかみ取る[こころ]は欲が深く満足度が分からずに、掴み損ねている人が多いのかも知れません。[しあわせ]は、人を愛する心・人のために役に立とうとする心がなければ手に入れることは難しいでしょう。

ところで、以前園便りで紹介したことがある私の書いた童話、『たんぼぼの夢』が絵本になりました。たんぼぼの子どもである綿毛がお母さんから離れていく物語です。石黒しろく氏の描いた美しい絵をご覧になりながら、心を癒やして下さい。幼児には内容が難しいのですが、これはお母さん達に読んでほしいと思っています。

お子さんが成長し、やがて親の元からそれぞれの世界に飛び立っていき、いつか来るであろうそんな切なく寂しい瞬間、その反面で我が子が成長した喜びと将来の希望などもあることを連想しながら読んでみて頂けたらと思います。そして、お子さんにも読み聞かせてあげて下さい。

コロナウイルスのニュースから目を離せない毎日が続き、皆さんは、多かれ少なかれ、心も身体も疲れていらっしゃると思います。そんな日常の一時の「いやし」になれば幸いです。